

# 仏の姿に打ち込みて

## 仏師 錦戸新観師に聞く

■ 錦戸 新観

出席 ■ 佐藤 俊明 (龍光寺住職・聞き手)

■ 黒田 武志 (善光寺住職)

### 錦戸先生との出会い

佐藤 おはようございます。五月下旬なのに朝から夏の陽射しの中、保谷市よりわざわざ御足労を頂きありがとうございます。

先日は、大日如来の脇仏として阿弥陀如来・薬師瑠璃光如来の開眼供養を滞りなく済ますこ

とができました。二年前には、大聖不動明王の脇立、矜羯羅・制陀迦の二童子をお造りいただき、これで善光寺の尊容も整ったことになりました。心から厚く御礼を申し上げます。

さて、錦戸先生と方丈さんとの出会い、どういうご縁でお会いなさったのか、そういう仏縁からお話し頂けますか。



黒田 それでは、私からお話しします。私は栃木の太田原市にある光真寺の六男として生まれました。昭和十三年一月一日に、長兄が五歳で亡くなったので、父は、その供養を兼ねてその後の子どもが無事に育つようにと、境内に「子育て地藏」を建立しました。子どもを亡くして悲しんでいる世の親御さんにもお参りしていただき、その功德を積むようと「自利利他の教え」を実践したわけです。また、明治の末に火災にあい、仮本堂だけで法事等をしていた頃から、求められれば、ささいな行事や宗派にもこだわらず、様々の人に寺を解放していたということですが。その一つに、真言宗金剛流栃木県本部が御詠歌の会場として光真寺を使っておりました。その役員の一人である本田さんに、この横浜の寺を持ったことを通知しましたら、早速訪ねてきてくださったのです。あの頃は、そまつな仮小屋の寺でして、ほんとうに「本来無一

物」からの出発でした。本田さんは「あなたがこれから立派なお寺を作ろうとするなら、私の知っている日本一の仏師、錦戸先生の仏像を安置すべきだ」と、おっしゃってくださいました。それですぐに、保谷市の先生のお宅におじゃましたのが、そもその縁です。そのときに立正佼成会の「久遠実成の南無釈迦牟尼仏」の尊像を彫られたのが先生だとお聞きしましたので、私もいつかきつと、先生に善光寺のために仏像を造っていただくこうと胸深く決めておりました。この誓願も十八年目になって、ようやくかになったわけです。高祖さまの御言葉「汝が一心、いまだ一心ならず」を肝に銘じて精進させていただいたおかげです。

あの時も、善光寺身代り不動明王の脇侍がないのでどうしたらよいものかと思ひ巡らしていたわけです。そうしていたらある日、霊夢をみせていただきました。不動明王が「錦戸新観師





矜羯羅・制陀迦童子

に頼め」と告げられたのです。道元禪師が、「夢中に夢を説く処、これ仏祖の国なり」と、おっしゃいましたが、この事情とは、意味あいはずれてきますが、私なりにストーンと心が決まったのです。

錦戸 あれはお昼頃だった、電話があったのは。それより前に、高島屋の個展に来て、たっさんの御祝儀をおいていたので…(笑)、あの坊さんだと思った。お不動さまのお告げというので、こりやあどんなに仕事があっても引き受けねばならんと思った。ご本体のお不動さまが、霊験あらたかと聞いたもので、それを助ける二童子も似るようにつとめた。寸法も合わせたので、小さくて可愛らしいのができてしまった。

黒田 そうです。とても調和がとれて、愛らしい二童子です。

錦戸 私の作品は、依頼者にどこか似ている。戦争中、天台宗の妙見寺へ疎開しておった。そ

この檀家から金剛仏を二躰造つてくれと頼まれた。大豆くらいの面相だが、一つは丸く可愛い顔、もう一つは細長く古びた顔になってしまった。そのおじいさんが言うのには、これは孫娘で、これは婆さんだ、と。こういうのは、仏さまのお手配というのかね。瓜ざね顔の婦人に頼まれて、ふくよかに造ろうとしたのに、ノミが入り過ぎて面長くなってしまう。

佐藤 今度のはどうでしょうか。方丈さんですか。それとも奥さんでしょうか。(笑)。釈迦殿の客殿に奉安されました法華経湧出品のレリーフ。あの四菩薩にしても、善光寺の息子さんたちに見えてきますね。

錦戸 そう、どこか似ているはずだ。あれも、最初は、校正会の本殿に納まるはずだったのが、善光寺に来てしまった。

### 仏さまの導きで

錦戸 私は夜は八時に寝て、十一時に起きて、二時間くらい物を書いたり考えたりする習慣になつている。今度の阿弥陀如来さまを、夜中、静まりかえった処でみつめていると、今までとは違う表情で語りかけてくるような感じに陥る。深い思いやりのお顔を拝していると、仏さまのおはからいだとしか考えられない。私の技ではない。

仏間には、師匠から授か<sup>ま</sup>った秘仏がある。これは、お坊さんでも拝めないし、参拝させてない。師匠から預<sup>か</sup>かる時に「よい香を焚いて給仕をしなさい」と申し渡された。だから、伽羅をたいている。同じ目方なら、金より高価だ。その功德によるものかもしれない。

この道で五十八年、八十三年の生涯を振り返れば、仏さまが導いてきてくださったとしか言

いようがない。これから、光真寺さんの釈迦三尊像にかかるが、平成五年まで他の何も出来ない。その後、念願の七観音さまがあるだけだ。果たして米寿まで命があるかどうか。

黒田 いや、先生は元気ですから、百歳まで大丈夫ですよ。六人の兄弟の観音さまと三十三人の分身観音さまを、楽しみにしてます。

錦戸 よい木はたくさん持つておる。松も楠も…。願い通りに出来るかなと考える時がある。でも、これも仏さまにお任せしたことだから…。

佐藤 それでは先生、制作するにあたって、仏像を彫刻する時の心構えのお話しをうかがいたいのですが。

錦戸 夏は四時、冬は五時には起きる。朝の勤行に二時間はかけている。七時に食事をして八時には仕事にとりかかる。いつもノミと槌を手にする前、制作中の仏さまにお拝して半時ほど祈願をする。夕方五時には一刀三礼して、香

を焚き気を静めてから、終りにしている。

よくどことが難しいかと聞くが、全部が難しい。特にお顔は全神経を使う。

昔の仏さまを観ると、たとえば京都の六波羅密寺や浄瑠璃寺の四天王さま、これらの股の下には原色のままの彩色が残っている。観えないところまで、きちんと仕上げている。

たいがい、依頼者からはこのくらいで造ってくれと頼まれる。その範囲内であるから、思いどおりに出来上がらないこともありうる。しかし、いくらお金を積まれても、出来ないとは断ることもある。やはり、お願いする人の心掛けだ。仏さまは、えこひいきをしない。ご利益がないというのは、自分が仏さまに尽くしてないからだ。

出来上がった仏さまが、依頼主に気に入ってもらえるということも難しい。たとえ、芸術的に完成していてもだ。仏さまを彫刻するという

ことは、信仰と技術と念願の三つが、一つにな  
って造っていかねば良い仏さまは出来上がらな  
い。その上で、誰が見ても自然に合掌するよう  
な仏さまは後世に残っていくのだろう。自己満  
足の芸術ではダメだと、戒めている。

佐藤 ですから、先生がお彫りになるものは、  
依頼者が気に入らないということはないと信じ  
ます。

### 一番大事なのは心

錦戸 芸術的にいうと、京都神護寺の薬師如  
来さん、あれは観ていて息が詰まる。許してな  
らない者は許さないと突き放し、人の三毒(貪・  
瞋・癡)をにらむかのような御眼。逃げ場がな  
くなる。このくらいのお師になりたいと思う。  
後は、ほとんど彫っていないのだが、芸術的にい  
ってもそうせざるを得ない。

それから、有名なお釈迦さまの苦行像もそう

左から錦戸師、黒田方丈、佐藤老師



だ。

黒田 あの、あばら骨のですか。確かパキスタンのラホール博物館所蔵ですね。ガンダーラ美術の最高傑作といわれておりますが。

錦戸 あれもやはり息が詰まる。裏に回って安心した。あれを全部仕上げたら、あの仏師は命を縮めたと思う。おそらく、手から粘土を離れた途端に寝込んでしまったのではないか。あれほど靈気が漂っているのだから。たしかに、人の姿をしていながら、人間を超えた気高い魂を——精神を表現したのが仏像だ。しかし、反対に仏さまを造らずにはいられない人々の不幸も思い知らされるようになった。それも歳のせいか。

人は、拝んで何もかも忘れたい気持ちと、失ってしまった心を仏さまに求めている。それに応えることができる仏さまをと、祈りながら彫っているのだが、難しい。恐ろしいことかもし

れない——魂を表現しようとするなんて。

佐藤 密教は加持祈禱が中心で、神秘的なものが含まれています。善光寺の大日如来はどうでしょうか。

錦戸 多くの人に愛されるように、ふくよかで大らかな美しさを出そうとした。大日さまは、太陽のように一切衆生の煩惱の闇を照らして、智慧の光明を輝やかす仏さまだから。

佐藤 そうですね。大いなる宇宙の母なるものを感じます。先ほど、方丈さんにお預けになった十一面観音を拝ませて頂きました。制作中、だいぶ苦勞されたとお聞きしましたが。

錦戸 家内が二階の階段から落ちて、自分でも何もかもなくなってはならなくなりました。これも、仏さまが与えてくださったものと考えている。

あの観音さまは、国宝の法隆寺九面観音さまをお手本にしている。自信がある作品の一つだ。五年十年と年月が過ぎていけば、良く見えてく



るはずだ。次の世代はどう見るか、彫師としての楽しみだ。

黒田 先生の『仏との出会い』にも載っていますね。この本の内容が、すばらしいと皆様が申しております。この本を読んで、先生の愛好者が増えたと思います。

佐藤 そういえば、観音さまのお顔はどこか先生の奥さんに似ていますね。

錦戸 まあ、五十年も一緒に居るのだから。本来の喜怒哀楽でなく、場所によって顔の表情を使い分ける人が、昔に比べて多くなってきたと思う。たしかに生活は豊かになったけど、魂は貧しい。そんなことを考えて、十一面観音さまを彫った。多くの顔を統一する意味で、正面の慈悲の顔は、心魂を込めてノミを入れた。「俺に円熟はない。老境もない」という気持ちで。

黒田 その心掛けが、立派な仏像を造り、健

康につながっていると思います。

### 彫刻を超えた仏像

錦戸 この間、伽羅のよいのが届いた。白檀の巨いのも持っている。そういう木を見ているのは楽しい。この銘木には、こういう仏さまを造ってみたいと考えるのは、浄土に住んでいるかのような喜びだ。しかし、老いゆく体はままならないし、月日はどんどん過ぎてゆく。私の寿命は、どのくらいなのだろうと、考える時もある。

佐藤 先生、彫刻家はみんな長生きしていますよ。

黒田 体と腕と全部を使っているからでしょう。米寿・白寿と、まだこれから二十年もあります。

錦戸 でもね、七十を越えると疲れる。重労働だからな。木を見ては、やらなければなら

いと思うけど、身体がいうことを聞かない。

黒田 仏さまを形にするのですから、生半かなことでは出来ません。

錦戸 しかし、仏さまは本当に助けてくれる。

黒田 それですから、よい仏像が出来上るのですね。

私も身代り不動明王のおかげで、先生にお会いすることが出来ました。そして、この素晴らしい十一面観音さまもお預りできたことに感謝しております。この後背は、実にモダンですね。時代を超えているというのか。

錦戸 九面観音さまが、そうなっている。斬新な意匠だよ。

だから、すぐれた仏さまはいつまで経っても新しい。新しくても、古くさいのがある。それから、いかにも彫りましたという仏さま、そして常に彫刻を超えた尊い仏さま、と四つに分けて観ている。

薬師寺の薬師さんなどの、本当に貴い仏さまを観ていると、如来さまと菩薩さまがお話しされていくような錯覚をする。このように明るく力強く、しかも上品で美しい仏さまを造るとなると、これは非常に難しい。仏師を取り巻く文化や人々の精神のありようが、関<sup>かかわ</sup>ってくる。何よりも、人々の仏さまに対しての真剣な祈りだよ。奈良時代の人々は、素朴にそうしていたのだろう。だから、今になっても若々しい如来さんを造れたのだ。

私も「精進を樂とし、精進を永遠<sup>とくわ</sup>の命とす」を座右銘として、彫り続けてゆきたい。

佐藤 先生にはますますご健勝であられ、長生きをされて、後世に残る傑作をお造りください。今日は暑い中、ありがとうございます。

黒田 最後に、読者のために、先生の詩をご紹介します。文芸誌に掲載されたものです。道元禅師の『傘松道詠』に「聞くままに また

心なき身にしあれば 己れなりけり軒の玉水」と、有名な歌があります。これに通じる詩だと、私は思っております。祖師の歌は「聞声悟道」。しずくの音を無心に聞いたときに、悟ったというのです。先生の詩は「見色明心」。眼の対象になつている形あるものをよく観て、心を明らかにしたと思います。万法に証されているとも感じられます。

ゆめ

ちいさき花に

宇宙の命が宿り

一滴の水玉に

万象を映す

生死流転は

永遠の命なり

善き光悪き光りも皆ともに

我行ないの証とぞ知る

(このたび錦戸新観先生は、第二十六回仏教伝道文化賞を授賞されました。)

